

注 意 事 項


- 1. 試験問題の数は 50 問で解答時間は正味 2 時間 25 分である。
- 2. 試験問題の持帰りを認めない。
- 3. 解答方法は次のとおりである。
  - (1) 各問題には a から e までの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101  a  b  c  d  e のうち  c をマークして  
 101  a  b  c  d  e とすればよい。

- (2) 答案の作成には HB の鉛筆を使用し、濃くマークすること。  
 良い解答の例……  (濃くマークすること。)  
 悪い解答の例……   (解答したことにならない。)
- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。
- (4) 1 問に二つ以上解答した場合は誤りとする。
- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 52歳の男性。2週前の健康診断結果を持参して来院した。4人家族(妻と2人の息子)。2年前に糖尿病を指摘されたが、家族に内緒にし、それまでと変わらない生活を送っている。父親が糖尿病に合併した心筋梗塞のために55歳で亡くなった。そのためか、糖尿病には恐怖心を持ち、これ以上悪くならないようにしようと思っている。社会的、年齢的にも健康には気をつけようと感じながらも、日々忙しい仕事の毎日である。健康診断結果：血圧130/70 mmHg、空腹時血糖130 mg/dl、HbA<sub>1c</sub> 6.2% (基準4.3~5.8)。

この患者が糖尿病治療を開始するのに有効性が低いのはどれか。

- a 家族の協力
- b 健康目標の明確化
- c 医師と患者の信頼関係
- d 健康と仕事の価値観の整理
- e 糖尿病合併症の悲惨さの強調

2 28歳の男性。歩行障害を主訴に来院した。兄も歩行障害があり、脊髄小脳変性症と診断されている。自分の症状がよく似ており、その病気ではないかと心配している。診察で、小脳性運動失調が認められ、遺伝性小脳変性症と診断された。

医師の対応として適切なのはどれか。

- a 遺伝子診断を受けるように強く勧める。
- b 疾患について患者が理解するまでよく説明する。
- c 職場の上司に診断名を知らせる。
- d 看護師やソーシャルワーカーの支援を求めない。
- e 同意を得ずに家系調査を行う。

3 28歳の男性。長期海外出張から帰国した後に全身倦怠感が出現したため、産業医の勧めで来院した。検査を行ったが異常はなく、心身症と診断した。患者はその後無断欠勤を続けており、会社から診断書を発行して欲しいとの連絡を電話で受けた。

まず行う対応で適切なのはどれか。

- a 本人の同意を得て欲しいと伝える。
- b 家族の同意を得て欲しいと伝える。
- c 診断書を作成し本人に郵送する。
- d 診断書を作成し産業医に郵送する。
- e 診断書を作成し会社に郵送する。

4 85歳の女性。「夕方になると右鼠径部から大陰唇にかけて腫れて痛い」という訴えで来院した。医師と患者との面接内容を以下に示す。

医師 ①「いつから、どんな症状があるのか、ゆっくり話してみてください」

患者 「2年前からこのあたりが痛むのです」(右鼠径部を指差す)

医師 「そうですか」

患者 「それに股のあたりが夕方になると腫れてきます」

医師 ②「それはご心配ですね」

患者 「心配で夜も眠れなくなってしまいました」

医師 「2年間どうしていらっしゃいましたか」

患者 「整形外科にも外科にも産婦人科にも行きました」

医師 ③「どんなふうに言われましたか」

患者 「なんともないと言われました。CTも撮りましたのに」

医師 「夕方腫れてくるなら、ヘルニアって言われませんでしたか」

患者 「いいえ」

医師 ④「……………(沈黙)……………」

患者 「前はこんなふうじゃなかったんです」

医師 「こんなふうじゃないというと？」

患者 「主人はそれは大きな人でして。私は長い間きちんと介護できましたから」

医師 「それはいつごろのことですか」

患者 「8年前から2年前までです」

医師 ⑤「そうするとご主人が亡くなられてから、痛みが始まったのですか」

医師の会話①～⑤について正しいのはどれか。

- a ①は限定的で患者が話しにくい質問である。
- b ②は唐突な応答になっている。
- c ③は診断することを回避しようとしている。
- d ④は話の促進に役立っている。
- e ⑤は患者の心の傷を逆なでしている。

5 医師と糖尿病患者 A さんとの会話を以下に示す。

医師 「A さん、今日の検査の結果では、空腹時血糖は 122 mg/dl ですが HbA<sub>1c</sub> は 8.5 % で、先月の 8.3 % に比べて良くありませんね」

患者 「先生、どうも食事療法が上手くいきません。どうしたらよいでしょうか」

医師 ①「では、最近の食事の内容について、どうぞ、ご自由に詳しく話してください」

患者 「いつも朝食は和食で、ご飯は軽く二膳と・・・(中略)・・・です。それから、時に間食もしています」

医師 ②「はい、それで(うなづく)」

患者 「最近、勤務が三交替になり、仕事が終わると同僚と軽く食事をするのも多く、日によって薬を飲み忘れることがあります」

医師 ③「それで、A さんとしてはご自分の病気をどのようにお考えですか。どうしてほしいと思っていますか」

患者 「勤務形態が変わったので、食事の時間が不規則になっています。薬を飲み忘れないようにしたいのです」

医師 ④「そうですね、飲み忘れをできるだけなくし、糖尿病の改善に向けて力になりたいと思います」

患者 「よろしくお願いします」

医師 ⑤「他にも何か言い忘れたご心配な点がありますか」

誤っているのはどれか。

- a ①は開放型の質問である。
- b ②は面接の促進に役立っている。
- c ③は解釈モデルを聞いている。
- d ④は患者支援の姿勢を示している。
- e ⑤は評価的対応である。

6 26 歳の女性。1 週間からの全身倦怠感、発熱および咽頭痛を主訴に来院した。扁桃は発赤し、白苔が付着している。頸部にリンパ節腫脹を認める。胸部聴診では心音、呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、右肋骨弓下に肝を 2 cm 触知し、脾濁音界の拡大を認める。血液所見：赤血球 386 万、Hb 11.5 g/dl、Ht 35 %、白血球 11,000 (桿状核好中球 10 %、分葉核好中球 30 %、好酸球 2 %、好塩基球 1 %、リンパ球 45 %、異型リンパ球 12 %)、血小板 13 万。血清生化学所見：総ビリルビン 1.0 mg/dl、AST 186 単位、ALT 196 単位、LDH 670 単位(基準 176~353)。

予想される病原体はどれか。

- a ウイルス
- b リケッチア
- c 細菌
- d 真菌
- e 寄生虫

7 78 歳の男性。2 か月前に脳卒中で倒れ、寝たきり状態である。仙骨部に病変が生じている。仙骨部の写真(別冊 No. 1)を別に示す。

この病変部への対応で適切でないのはどれか。

- a 体位変換
- b 栄養補給
- c 病変部の乾燥
- d 病変部の感染防止
- e 体圧分散寝具の使用

別冊  
No. 1 写真

8 56歳の男性。5日前に皮膚の黄染に気づき、徐々に増強したため来院した。尿の色が濃くなり、便の色は薄くなったが、腹痛と発熱とは認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。

まず行う検査はどれか。

- a 腹部エックス線単純撮影
- b 静脈性胆道造影
- c 腹部超音波検査
- d 上部消化管内視鏡検査
- e 肝生検

9 20歳の女性。首の痛みを訴えて来院した。3日前から左側頸部に持続的な痛みを感じるようになった。体温36.8℃。脈拍76/分、整。左頸部に径1cmのリンパ節を2個触知し、圧痛がある。甲状腺は触知しない。左後頭部の髪の毛の生え際に径1.5cmの発赤、腫脹がみられ、毛包に分泌物が付着している。口腔内に異常所見はない。腋窩と鼠径部とにリンパ節を触知しない。心音と呼吸音とに異常はなく、腹部に肝・脾を触知しない。

頸部リンパ節腫脹の原因として最も考えられるのはどれか。

- a アレルギー性
- b ウイルス性
- c 化膿性
- d 結核性
- e 腫瘍性

10 55歳の男性。3か月前に右舌縁に違和感とひりひりした感じとが出現し、次第に増強したため来院した。舌の写真(別冊No. 2)を別に示す。

頸部の触診で最も注意すべき部位はどれか。

- a 耳下腺部
- b 顎下部
- c 前頸部
- d 後頸部
- e 鎖骨上窩

別冊  
No. 2 写真

11 26歳の男性。朝から腹痛が持続するため来院した。朝食後、嘔気と心窩部の痛みとが出現し、痛みは次第に右下腹部に移動した。体温37.6℃。呼吸数14/分。脈拍92/分、整。血圧118/78 mmHg。血液所見：赤血球450万、白血球13,000、血小板22万。

認められる所見はどれか。

- a 腹部の膨隆
- b 腸雑音の亢進
- c 肺肝境界の消失
- d 右下腹部の反跳痛
- e 深呼吸による痛みの増強

12 2人の患者に血球検査、血液凝固検査および血清生化学検査のための採血を行うことになった。試験管、名札(IDシール)およびトレーの準備の写真(別冊No. 3 ①~⑤)を別に示す。

適切なのはどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別冊

No. 3 写真①~⑤

13 45歳の男性。腹痛のため来院した。1週間前から上腹部と背部とに強い痛みがあり、食事ができなくなった。20歳ころから1日3合の日本酒をほぼ毎日飲んでいる。意識は清明。身長165 cm、体重62 kg。脈拍92/分、整。血圧110/72 mmHg。顔面は苦悶様。背中を丸めるような姿勢をしている。腹部聴診では腸雑音が減弱している。心窩部に圧痛を認める。尿所見：蛋白1+、糖(-)、ケトン体3+、潜血(-)。血液所見：赤血球442万、Hb 15.1 g/dl、白血球10,900、血小板23万。血清生化学所見：総ビリルビン3.5 mg/dl、AST 33単位、ALT 66単位、アミラーゼ94単位(基準37~160)、Ca 8.6 mg/dl。CRP 23.8 mg/dl。

この患者が急性膵炎である検査前確率を50%としたときの検査後確率はどれか。血清アミラーゼの急性膵炎に対する感度は78%、特異度は88%とする。

- a 11%
- b 20%
- c 28%
- d 35%
- e 43%

14 48歳の女性。腹痛と嘔吐とがあり救急車で来院した。5時間前から差し込むような腹痛が始まり、間欠的に混濁した黄色の消化管内容を嘔吐した。腹痛が始まってから排尿はない。3年前に胃下垂全摘術を受けた。意識清明。脈拍104/分、整。血圧98/82 mmHg。心音と呼吸音とに異常はない。腹部はやや膨満し、高調の腸雑音を聴取する。

まず行う輸液の組成はどれか。

	Na <sup>+</sup> (mEq/l)	K <sup>+</sup> (mEq/l)	Ca <sup>2+</sup> (mEq/l)	Cl <sup>-</sup> (mEq/l)	乳酸 (mEq/l)	ブドウ糖 (%)
a	130	4	3	109	28	0
b	77	30	0	59	48	1.5
c	70	42	12	70	54	25
d	35	20	0	35	20	4.3
e	0	0	0	0	0	5

15 60歳の女性。右大腿骨頸部骨折のため入院して手術を受けた。手術前は血圧122/78 mmHgで、心電図と胸部エックス線写真とに異常はなかった。術後7日間臥床していたが、リハビリテーションのために歩行訓練を始めたところ、訓練の途中で、突然息苦しくなり、気分が悪くなってうずくまった。呼吸数36/分。脈拍128/分、整。血圧80/42 mmHg。顔色は不良で発汗がある。胸部にII音の亢進を認めるがラ音は聴取しない。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：PaO<sub>2</sub> 48 Torr、PaCO<sub>2</sub> 26 Torr。マスクによる酸素吸入を行い、静脈路を確保した。

まず投与するのはどれか。

- a ジアゼパム
- b プロプラノロール
- c プロカインアミド
- d ドパミン
- e アミノフィリン

16 28歳の男性。水蒸気の噴出事故に遭遇し、救急車で搬送された。熱傷を顔面、頭部、右上肢および体幹前面に認める。

熱傷面積の割合はどれか。

- a 18%
- b 27%
- c 36%
- d 45%
- e 54%

17 61歳の男性。発熱、咳および痰のために来院した。5日前に咽頭痛と悪寒とが出現し、3日前から38.5℃の発熱、咳、痰および全身倦怠感が出現した。市販の感冒薬を服用しても改善しなかった。意識は清明。脈拍96/分、整。血圧148/88 mmHg。右上肺野に coarse crackles を聴取する。喀痰の Gram 染色標本(別冊 No. 4)を別に示す。

予想される検査所見はどれか。

- a 赤沈 12 mm/1時間、白血球 2,400、CRP 1.0 mg/dl
- b 赤沈 12 mm/1時間、白血球 13,800、CRP 1.0 mg/dl
- c 赤沈 83 mm/1時間、白血球 2,400、CRP 1.0 mg/dl
- d 赤沈 83 mm/1時間、白血球 2,400、CRP 21.3 mg/dl
- e 赤沈 83 mm/1時間、白血球 13,800、CRP 21.3 mg/dl

別 冊  
No. 4 写 真

18 67歳の男性。乗用車に後方から跳ねられ、救急車で搬送された。意識は清明で、四肢麻痺はなかったが、頸部の疼痛を訴えたので頸椎カラーを装着した。頭部エックス線単純写真と頸部エックス線単純写真とに異常所見を認めなかった。しかし、1時間後に意識が混濁し、右瞳孔が散大し、右側の対光反射の消失と左半身の麻痺とが出現してきた。

まず行う検査はどれか。

- a 腰椎穿刺
- b 脳波
- c 頭部単純 CT
- d 脳血管造影
- e 頭部単純 MRI

19 8歳の女児。高熱を主訴に来院した。数年前から年に数回の高熱を繰り返している。感冒様症状はなく、左腰部に自発痛と叩打痛とを認める。体温39.5℃。脈拍112/分、整。尿所見：蛋白1+、糖(-)、沈渣に赤血球2~3/1視野、白血球30~50/1視野、細菌2+。腹部超音波検査で左腎に中等度の腎盂腎杯の拡張を認める。

基礎疾患の確定に最も有用な検査はどれか。

- a 尿培養
- b 尿流測定
- c 腹部単純 CT
- d 排尿時膀胱造影
- e 腹部エックス線単純撮影

20 35歳の女性。心窩部の不快感を訴えて来院した。症状は1年以上続いており、既に4か所の病院を受診した。そのたび精密検査を受けたが症状を説明できる異常は認められなかった。しかし患者はこれまでの医師の説明に納得できず、「がんのような重い病気なのではないかと思う。検査でみつからないだけなのではないか。医師が隠しているのではないかと疑い深く不安になっており、再度同じような精密検査を要求している。

最も考えられるのはどれか。

- a うつ病
- b 不安障害
- c 薬物依存症
- d 統合失調症
- e 身体表現性障害(心気障害)



21 55歳の女性。右眼の急激な視力障害を訴えて来院した。視力は右0.01(矯正不能)、左1.2(矯正不能)。眼圧は右13mmHg、左12mmHg。右の眼底写真(別冊No. 5)を別に示す。

原因とならないのはどれか。

- a 糖尿病
- b 高血圧症
- c 高脂血症
- d 骨粗鬆症
- e 動脈硬化症

別冊  
No. 5 写真

22 24歳の初産婦。妊娠39週2日に陣痛が発来し入院した。陣痛開始後10時間の時点で子宮口開大8cm、展退度80%、先進部は児頭でSP+2cm。陣痛周期3分、発作50秒。このころから産婦の呼吸数が1分間に約60となり、手足のしびれと息苦しさを訴え、指関節の伸展と母指の内転とがみられた。脈拍100/分、整。血圧122/78mmHg。胎児心拍数陣痛図では異常を認めない。

行うべき処置はどれか。

- a 呼気吸入
- b 左側臥位
- c 子宮収縮促進薬投与
- d 気管(内)挿管
- e 帝王切開術

23 67歳の女性。2年前に胃癌に対して胃全摘術を受けた。6か月前に両側肺、縦隔リンパ節および腹膜に転移病変を認めた。1か月前から胸水の貯留が認められ増加してきている。3日前から、縦隔リンパ節転移による食道の狭窄が強くなり入院した。

この患者に最も適した栄養ルートはどれか。

- a 末梢静脈路
- b 中心静脈路
- c 経鼻経管カテーテル
- d 腸瘻造設
- e 経口摂取

24 5か月の乳児。早朝ぐったりしているのに母親が気付いたとして救急車で搬入された。意識はなく対光反射も認められない。脈拍は触れず、心・肺は停止している。直腸温は35.0℃。全身にチアノーゼ、打撲傷および紫斑を認める。30分間心肺蘇生を試みた後、死亡を確認した。

次に行うのはどれか。

- a 母親からの成育歴の聴取
- b 全身エックス線単純撮影
- c 病理解剖
- d 死亡診断書の作成
- e 警察への届出

25 38歳の男性。強い呼吸困難のため救急車で搬入された。同僚によると朝から喉が痛いため、ヨード剤でうがいをし、市販のトローチをなめたところ、15分経過したころから次第に呼吸が苦しくなってきたという。来院時、呼びかけに応答はなく、頸動脈の拍動をわずかに触知する。顔面にはチアノーゼが著明である。

まず行う処置はどれか。

- a 気道確保
- b 心マッサージ
- c 人工呼吸
- d 除細動
- e 静脈路確保

26 50歳の男性。職場の定期健康診断の胸部エックス線写真で右下肺野に結節陰影が初めて認められた。自覚症状はない。25歳ころから1日30本の喫煙歴がある。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球426万、Hb 13.8 g/dl、Ht 40%、白血球6,800、血小板24万。血清生化学所見：空腹時血糖103 mg/dl、総蛋白7.2 g/dl、アルブミン3.4 g/dl、尿素窒素12 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、尿酸5.6 mg/dl、総コレステロール208 mg/dl、トリグリセライド106 mg/dl、AST 20単位、ALT 18単位、LDH 330単位(基準176~353)、 $\gamma$ -GTP 48単位(基準8~50)。心電図に異常を認めない。

医師の対応として最も適切なのはどれか。

- a 来年まで経過を観察するよう伝える。
- b すぐに禁煙するよう指導する。
- c 結果を説明し精密検査が必要であることを伝える。
- d 詳しくは説明せず専門病院へ紹介する。
- e がんの可能性が高いと家族に伝える。

27 45歳の女性。乳癌の再発で半年間外来に通っている。再発であることを告げられた後から不安、不眠、食欲不振および気分の落ち込みがみられるようになった。最近になって、「眠れなくてつらい。もう何もしたくない。生きていても仕方がない」と言うようになり、表情も乏しくなってきた。

担当医の対応として最も適切なのはどれか。

- a 経過観察を続ける。
- b 頑張るよう励ます。
- c 睡眠薬の使用を勧める。
- d ホスピスへの入院を勧める。
- e 精神科医にコンサルテーションする。

28 71歳の男性。リハビリテーション施設退院後の診療を依頼された。3か月前、隣町に外出した時に脳卒中を発症し、右片麻痺となり入院治療を受けた。自宅の受け入れ準備がないまま、2週前に急に退院となり自宅で療養している。意識は清明であるが、入浴や排泄などの日常生活動作(ADL)に介助が必要である。65歳の妻が一人で介護をしていたが、体力と気力とに限界を感じている。

この患者の療養に必要な性の少ないのはどれか。

- a 短期入院先を紹介する。
- b クリニカルパスを作成する。
- c ケアマネージャーを紹介する。
- d 訪問介護ステーションを紹介する。
- e 福祉用具を借りられるよう援助する。

29 46歳の男性。自営業。健康診査で肝障害を指摘され来院した。自覚症状はない。30歳ころからの常習飲酒家で、これまでに酔って妻や子供に暴力を振るったり、飲酒運転で事故を起こしたこともある。最近では、朝から飲酒して仕事をすることが多く、妻が注意すると不機嫌になる。本人は「自分は酒を止めようと思えばすぐに止めることができるので、飲酒についての助言は必要ない」と言う。現在、日本酒5合/日。身長162cm、体重58kg。血圧148/86mmHg。胸部に異常所見なく、腹部に肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球398万、Hb13.1g/dl、Ht40%、白血球6,300、血小板16万。血清生化学所見：総蛋白7.9g/dl、アルブミン3.9g/dl、総コレステロール288mg/dl、トリグリセライド220mg/dl、総ビリルビン0.9mg/dl、AST84単位、ALT46単位、 $\gamma$ -GTP188単位(基準8~50)。免疫学所見：HBs抗原(-)、HCV抗体(-)。腹部超音波検査で肝の輝度の増強と肝腎コントラストの増加とを認める。

この患者への対応で最も重要なのはどれか。

- a 家族への暴力行為を嚴重に注意する。
- b 外来での定期的な肝機能検査を継続させる。
- c 内科病棟に一時的に入院させ飲酒の機会を断つ。
- d 飲酒による終末期肝硬変の悲惨さを強調する。
- e 禁酒を目標にアルコール依存症であることを理解させる。

30 53歳の男性。健康診断で耐糖能異常を指摘され、内科外来を受診した。糖尿病に対する知識と簡単な食事指導とを受けた。身長176cm、体重88kg。2回目の受診時の医療面接でのやり取りを示す。

医師 「この1か月、いかがでしたか」

患者 「あまり変わったことはないです」

医師 「食事や体重、身の回りのことで、小さな変化でもありませんか」

患者 「毎日暑くてね」

医師 「そうですね、残暑がきびしいですね」

患者 ①「そうです。私は水を飲んでも太る体質ですし、この時期はちょっと」

医師 「じゃあ、体重にも変化はないですか」

患者 ②「標準体重よりはだいぶ重いですが、困ったことはないです」

医師 「なにか工夫をされているのですか」

患者 ③「ないですね、食事を減らすと元気が出ないでしょう」

医師 「そうですね。食事について考えることはありますか」

患者 ④「年齢や糖尿病ということからは、好みより量やカロリーが大切なんですかね」

医師 「食事量は多いのですか」

患者 ⑤「そんなに多くはないですよ」

この患者の会話①~⑤で治療への関心が生まれつつあると考えられるのはどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

次の文を読み、31、32の問いに答えよ。

60歳の男性。前胸部の締めつけ感を自覚したため診察予約日外に来院した。

**現病歴** : 2年前の健康診断で高血圧と高脂血症とを指摘され、外来通院している。これまで薬は欠かさず服用し、特に症状もなく経過しており、1週前に受診した時にも問題はないとされた。毎朝自宅で血圧を測定している。3日前から前胸部が締めつけられるようになり、心配になった。来院時には症状はなかったが至急心電図検査の指示を受け、検査を済ませて待合室で待っていた。外来は大変混み合っており、2時間経ってもまだ診察の順番が回ってこないで怒り出した。いつもの担当医が別室で話を聞くことになった。

**既往歴** : 特記すべきことはない。

**生活歴** : 喫煙:20本/日、38年。

**現症(1週前)** : 身長166cm、体重72kg。体温36.5℃。脈拍68/分、整。血圧138/88mmHg。結膜に貧血と黄疸とを認めない。胸部に心雑音はなく、呼吸音に異常を認めない。腹部は軽度膨隆しているが、肝・脾を触知せず、圧痛を認めない。下肢に浮腫を認めない。

**検査所見(1週前)** : 血清生化学所見:空腹時血糖100mg/dl、総蛋白7.6g/dl、アルブミン5.2g/dl、尿素窒素18mg/dl、クレアチニン1.2mg/dl、尿酸7.0mg/dl、総コレステロール240mg/dl、トリグリセライド180mg/dl、CK30単位(基準10~40)。CRP0.4mg/dl。心電図と胸部エックス線写真とに異常を認めない。

31 最も適切な対応はどれか。

- a 普段どおりに診察する。
- b 怒りは正当なものと評価する。
- c 怒りに対して厳正な態度で臨む。
- d 患者の感情を理解したことを伝える。
- e 予約外であるから仕方がないとなだめる。

32 本日の心電図は1週前のものと変わりはない。患者の胸部症状の診断に最も有用な情報はどれか。

- a 今朝の自宅血圧
- b 昨日の喫煙本数
- c 労作と主訴の関連
- d 診察時のストレスの有無
- e 患者が自分で思い当たる原因

次の文を読み、33、34の問いに答えよ。

52歳の男性。呼吸困難を主訴に来院した。

現病歴：半年前から夕方になると足背部が腫れることに気付いた。下肢のむくみは次第に増強して大腿にも広がり、体重が10kg増加した。5日前から睡眠中に胸苦しくなり目覚めるようになった。坐っていると呼吸が少し楽になる。

既往歴：35歳で生命保険加入時に尿糖を指摘された。

現症：意識は清明。身長166cm、体重78kg。体温36.5℃。呼吸数24/分。

脈拍112/分、整。血圧168/90mmHg。心雑音はなく、両肺野にcoarse cracklesを聴取する。腹部は軽度膨隆し、肝を右肋骨弓下に3cm触知する。両下肢に著明な浮腫を認める。膝蓋腱反射は両側とも減弱している。

検査所見：尿所見：蛋白3+、糖1+、ケトン体(-)、潜血(-)、沈渣に赤血球2~3/1視野、白血球2~3/1視野。血液所見：赤血球311万、Hb9.4g/dl、Ht30%、白血球5,000、血小板22万。血清生化学所見：血糖182mg/dl、総蛋白4.8g/dl、アルブミン2.0g/dl、尿素窒素32mg/dl、クレアチニン2.8mg/dl、AST36単位、ALT24単位、LDH350単位(基準176~353)、Na130mEq/l、K5.0mEq/l、Cl102mEq/l。

33 まず行う検査はどれか。

- a 胸部エックス線撮影
- b 腹部超音波検査
- c 胸部CT
- d 運動負荷心電図
- e 冠動脈造影

34 まず行う治療はどれか。

- a 輸液
- b 輸血
- c 血液透析
- d 利尿薬投与
- e 副腎皮質ステロイド薬投与

次の文を読み、35、36の問いに答えよ。

48歳の女性。全身倦怠感と発熱とのため来院した。

**現病歴** : 3か月前から全身倦怠感を自覚し、1か月前から発熱と体重減少とが出現した。

**既往歴** : 特記すべきことはない。

**現症** : 意識は清明。身長154 cm、体重54 kg。体温38.4℃。呼吸数20/分。脈拍96/分、整。血圧112/72 mmHg。眼瞼結膜に貧血はなく、眼球結膜に黄疸はない。両側の頸部と腋窩とに大豆大のリンパ節を数個触知する。胸部所見に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、脾を左肋骨弓下に2 cm触知する。下肢に浮腫を認めない。

**検査所見** : 尿所見: 蛋白(-)、糖(-)。血液所見: 赤血球380万、Hb 11.5 g/dl、Ht 35%、白血球6,200、血小板27万。血清生化学所見: 総蛋白7.0 g/dl、アルブミン4.0 g/dl、クレアチニン0.7 mg/dl、AST 22単位、ALT 12単位、LDH 560単位(基準176~353)、CK 35単位(基準10~40)。CRP 3.2 mg/dl。

35 この患者から聴取する情報のうち診断に最も有用なのはどれか。

- a 熱型
- b 咳
- c 月経異常
- d 頻尿
- e 食思不振

36 この患者でリンパ節腫脹の成因の鑑別に最も有用なのはどれか。

- a 数
- b 部位
- c 有痛性
- d 大きさ
- e 可動性

次の文を読み、37、38の問いに答えよ。

24歳の女性。月経の遅れを主訴に来院した。

**現病歴** : 最終月経は平成16年12月10日から7日間。通常の月経周期は28~30日。平成17年1月中旬ころから全身倦怠感があり、悪心も次第に強くなり、嘔吐も数回経験した。尿回数も最近増加しているが、排尿痛はない。昨日(2月18日)から褐色の帯下を少量認めている。

**既往歴** : 初経12歳、0経妊0経産。他に特記すべきことはない。

**家族歴** : 特記すべきことはない。

**現症** : 身長164cm、体重55kg。体温37.3℃。呼吸数20/分。脈拍76/分、整。血圧110/70mmHg。子宮は前傾前屈、手拳大、軟。膣分泌物は褐色、少量。経膣超音波検査で子宮腔内に胎嚢を認め、胎児頭殿長30mmで胎児心拍動を確認できる。

**検査所見** : 尿所見:蛋白(-)、糖(-)。血液所見:赤血球396万、Hb12.0g/dl、Ht36%、白血球8,800、血小板33万。

37 この患者で異常な症候はどれか。

- a 発熱
- b 全身倦怠感
- c 嘔吐
- d 頻尿
- e 性器出血

38 その後、妊娠が順調に経過したとき、平成17年7月上旬ころに最も発症しやすいのはどれか。

- a 睡眠時無呼吸症候群
- b 高血圧症
- c 鉄欠乏性貧血
- d 糖尿病
- e 深部静脈血栓症

次の文を読み、39、40の問いに答えよ。

1歳6か月の男児。全体的な成長発達の遅れを心配した母親に連れられて来院した。

現病歴： 在胎34週、出生体重2,380g、経膈分娩で出生。頸定4か月、坐位8か月、ひとり歩き16か月であった。現在、「パパ、ママ」など2、3語が言える。母親の言うことは理解し、絵本の指差しはできる。1日に離乳食を3回と牛乳200mlとを摂取している。

既往歴： 7か月時に突発性発疹に罹患した。他に特記すべきことはない。

現症： 身長77.4cm、体重9,720g。大泉門は閉じている。胸部聴診で心雑音はなく、呼吸音に異常は認めない。腹部で右肋骨弓下に肝を2cm触知するが、脾は触知しない。生歯は12本。

39 この児について正しいのはどれか。

- a やせである。
- b 低身長である。
- c 乳歯萌出が遅れている。
- d 言語発達が遅れている。
- e 運動発達は正常である。

40 診察後の母親への声かけとして適切でないのはどれか。

- a 何か聞き忘れたことはありませんか。
- b 次は6か月後に診せてください。
- c よく抱っこしてあげてください。
- d 毎日体重を量ってください。
- e 心配しないで気をつけて帰ってください。



次の文を読み、41、42の問いに答えよ。

70歳の男性。健康診査で異常値を指摘されたため報告書を持参して来院した。自覚症状はない。

現病歴：2年前に事務職を退職したが、職場での最後の健康診断では特に異常は指摘されていない。

既往歴：10年前に左鼠径ヘルニアの手術を受けた。10年前から禁煙している。

飲酒歴は30年前から日本酒1日1合。

1か月前の健康診査結果：

身長	163 cm	空腹時血糖	130 mg/dl	
体重	61.0 kg	総蛋白	7.0 g/dl	
血圧	160/94 mmHg	アルブミン	4.5 g/dl	
尿	蛋白	(-)	尿素窒素	14 mg/dl
	糖	(-)	クレアチニン	0.9 mg/dl
	ウロビリノゲン	(±)	尿酸	6.8 mg/dl
	ケトン体	(-)	総コレステロール	236 mg/dl
	潜血	(-)	トリグリセライド	155 mg/dl
			総ビリルビン	1.0 mg/dl
血液	赤血球	460万	A S T	30 単位
	ヘモグロビン	14.0 g/dl	A L T	32 単位
	ヘマトクリット	43 %	γ - G T P	60 単位 (基準 8 ~ 50)
	白血球	6,600	胸部エックス線写真	異常を認めない
	血小板	22万	心電図	異常を認めない

41 この患者の身体診察で有用性が低いのはどれか。

- a 眼底鏡検査
- b 耳鏡検査
- c 腹部聴診
- d 深部(腱)反射
- e 足背動脈の触診

42 この患者で脳血管障害のリスクを下げるのに最も適切なのはどれか。

- a 禁酒
- b 体重の減量
- c 血圧の正常化
- d 血糖の正常化
- e 血清脂質の正常化

次の文を読み、43、44の問いに答えよ。

57歳の男性。発熱と咳とを主訴に来院した。

現病歴：最近、仕事が忙しくて十分睡眠がとれない状況が続いていた。6日前から咳嗽と喀痰とが出現し徐々に増悪してきた。喀痰は黄色で膿性。3日前からは39℃台の発熱も加わり、全身倦怠感も出現してきた。胸痛と呼吸困難とはなかった。

既往歴：40歳時、健康診断で尿糖陽性を指摘されたが放置していた。

現症：意識は清明。身長163cm、体重62kg。体温39.2℃。呼吸数24/分。脈拍104/分、整。血圧146/84mmHg。胸部聴診で右下肺野にcoarse cracklesを聴取する。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖1+。血液所見：赤血球440万、Hb14.2g/dl、Ht44%、白血球14,500(後骨髄球2%、桿状核好中球20%、分葉核好中球45%、好酸球3%、単球5%、リンパ球25%)。血清生化学所見：血糖124mg/dl、総蛋白6.6g/dl、尿素窒素18mg/dl、クレアチニン1.2mg/dl、総ビリルビン0.8mg/dl、AST40単位、ALT35単位、LDH350単位(基準176~353)。CRP15.6mg/dl。胸部エックス線写真(別冊No.6)を別に示す。

別冊  
No. 6 写真

43 この患者にまず行う検査はどれか。

- a 喀痰微生物学検査
- b 呼吸機能検査
- c 肺動脈造影
- d 心エコー検査
- e 気管支鏡検査

44 最も考えられるのはどれか。

- a 肺炎
- b 肺結核
- c 肺梗塞
- d 肺水腫
- e 肺線維症

次の文を読み、45、46の問いに答えよ。

20歳の男性。右下腿の創傷と疼痛とのため救急車で搬送された。

現病歴：バイクの運転中に乗用車と衝突して転倒し受傷した。

既往歴：特記すべきことはない。

現症：意識は清明。身長170 cm、体重68 kg。体温36.6℃。脈拍92/分、整。血圧124/80 mmHg。ズボンには血液と砂とが多量に付着している。ズボンの破れ目から皮膚の挫創と損傷した筋とを認める。右下肢以外には明らかな外傷所見はない。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球440万、Hb 13.8 g/dl、Ht 42%、白血球8,400、血小板23万。血清生化学所見：総蛋白7.2 g/dl、尿素窒素10 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、AST 35単位、ALT 10単位、Na 142 mEq/l、K 4.5 mEq/l、Cl 102 mEq/l。

45 まず確認すべき損傷はどれか。

- a 腱断裂
- b 靭帯断裂
- c 動脈断裂
- d 神経断裂
- e 関節包断裂

46 診察の結果、脛骨と腓骨との骨折を認めた。

まず行う処置はどれか。

- a 静脈の縫合
- b 皮膚の縫合
- c 骨折の内固定
- d 抗菌薬の投与
- e 創部のデブリドマン

次の文を読み、47、48の問いに答えよ。

54歳の男性。冷汗を伴う胸痛を訴え、救急車で搬送された。

現病歴：5か月前から労作時に胸痛を自覚していた。胸痛は5分間持続し、安静で消失した。2週前から頻度が増し、安静時にも出現するようになった。4時間前から冷汗を伴う胸痛が持続している。

既往歴：10年前から高脂血症を指摘されていた。

家族歴：兄が40歳で突然死。

生活歴：たばこ40本/日を30年間。機会飲酒。

現症：意識は清明。身長166cm、体重75kg。呼吸数18/分。脈拍96/分、整。血圧120/74mmHg。顔貌は苦悶様。心音ではⅢ音を聴取する。呼吸音は正常。腹部は平坦で、軟。下腿に浮腫を認めない。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球450万、Hb14.6g/dl、Ht46%、白血球12,800、血小板16万。血清生化学所見：総蛋白6.8g/dl、アルブミン3.4g/dl、クレアチニン0.8mg/dl、総コレステロール260mg/dl、総ビリルビン0.9mg/dl、AST250単位、ALT35単位、LDH350単位(基準176~353)、CK1,850単位(基準10~40)、Na138mEq/l、K3.6mEq/l、Cl99mEq/l。CRP1.6mg/dl。来院時の心電図(別冊No.7A)を別に示す。

別冊  
No. 7 図A

47 診断はどれか。

- a 急性心筋梗塞
- b 狭心症
- c 肺塞栓症
- d 心筋症
- e 大動脈解離

48 入院後突然、眼球が上転して意識がなくなり、脈を触れなくなった。このときのモニター心電図(別冊No.7B)を別に示す。

まず行う処置はどれか。

- a 人工呼吸
- b 除細動
- c 塩化カリウム液急速静注
- d 補助循環
- e 心臓ペースメーカー

別冊  
No. 7 図B

次の文を読み、49、50の問いに答えよ。

20歳の男性。右下腹部痛を主訴に夕方来院した。

現病歴：朝から心窩部痛と悪心とがあった。市販の胃腸薬を内服したが軽快せず、午後になって痛みが右下腹部に局限してきた。朝から排便はない。

既往歴・家族歴：特記すべきことはない。

現症：意識は清明。身長171cm、体重65kg。体温37.8℃。脈拍76/分、整。血圧102/60mmHg。腹部は平坦で、腸雑音は減弱している。肝・脾は触知しない。右下腹部に圧痛を認め、Blumberg徴候が陽性である。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖(-)、ウロビリノゲン(±)、ビリルビン(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球510万、Hb17.0g/dl、Ht48%、白血球18,000(桿状核好中球20%、分葉核好中球49%、好酸球1%、単球2%、リンパ球28%)、血小板30万。プロトロンビン時間12秒(基準10~14)。血清生化学所見：総蛋白7.5g/dl、尿素窒素11mg/dl、クレアチニン1.0mg/dl、AST20単位、ALT18単位、LDH230単位(基準176~353)、アミラーゼ150単位(基準37~160)、CK18単位(基準10~40)。CRP8.3mg/dl。

49 最も考えられるのはどれか。

- a 急性胃炎
- b 急性虫垂炎
- c 腸閉塞
- d 急性膵炎
- e 尿路結石

50 翌日まで抗菌薬を投与したが改善がみられなかった。

次に行う治療はどれか。

- a 制酸薬投与
- b 抗コリン薬投与
- c 浣腸
- d イレウス管挿入
- e 手術

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受験番号	氏名(楷書で書くこと)